7 昔から今へと続くまちづくり

1 大昔の中標津町

町に人が住むようになったのはいつごろで、どのへんということは、はっきりしていません。

しかし、今まで発見された土器などを調べてみると、約6,000年前には、じょうもん土器をつかった人々が住んでいたことがわかっています。

じょうもん土器をつかった人々や、その後生活していたぞくじょうもん土器やさつもん土器をつかった人々、そしてアイヌの人々は、日当たりのよい丘や、水をつかうのにべんりな川の近くに家をつくりました。

人々はそこで土をやいてつくった土器や、石でつくった石器などをつかい、山や川からの自然のめぐみをうけて生活していました。

↑ビノス貝で作られたペンダント

↑イノシシの牙で作られたうでわ

北海道には生息していないイノシシの牙で作られたうでわが計根別市街の近くのじょうもん時代の遺跡から発見されている！

↑復元された、たて穴住居

↑たて穴住居あとを発掘調査しているようす（平成22年）

2 「和人」とアイヌの人たち

むかしの北海道には、たくさんのアイヌの人が住んでいました。川のある所にそってコタン（村）があり、魚や貝、けものをとって生活していました。アイヌの人が住んでいたあとやチャシ（山城）のあとがいくつかのこされています。これらはたいてい丘の上や見晴らしの良いところにつくられています。アイヌの人は熊などの、たましいを祭れば、よろこんで神の国へ帰って行けると信じていました。その祭りの場所を「熊送り場」といいます。熊は、神の子です。送るぎ式を、「イヨマンテ」といい、とても重要なものと考えていました。中標津地方は、アイヌの人たちが、魚やしか、熊などをとる、とても重要な場だったのです。大正時代のはじめに中標津へ移住した西村武重が、アイヌの人から聞き取り今の「養老牛温泉」までたどりつきました。そこには、ヒグマの頭の骨がおよそ400頭分祭だんの上にまつられていたのを目の当たりにしています。アイヌの人たちは、何百年も前から、

↑俣落のチャシあと

↑養老牛温泉

↑ひぐまの頭骨の祭だん
（出典：標茶町町史編纂事務室）

標茶町虹別より養老牛へ入浴しに親族で行き来して、男の人はヒグマを狩ったり、女の人はヤマベを釣ったり、植物のイラクサを温泉にひたしてやわらかくして着物の糸を作って編んでいました。

また、釧路・根室・網走に行く通り道となっていて、アイヌの人たちが利用する駅てい（りょかん）もありました。このようにして、アイヌの人たちは、たがいに助けあい、村おさの命れいにしたがって、きまり正しい生活をおくっていました。

山や川にはたくさんの食べものがありました。畑で作物も作るようになりました。人々は、このようにくらせることを神に感謝していました。

和人とアイヌの人々

今から700年あまり前、海や川の幸をもとめて、えぞ地とよばれていた北海道に、本州からわたってきて住み着く人が多くなりました。これらの人たちはアイヌの人たちにたいして、和人とよばれていました。

根室地方にはじめて和人がきたのは、250年ほど前のことです。和人は、奥地にどんどん入りこみ、アイヌの人たちのとったサケ・マス・ニシン・けもの毛皮、砂金などと、自分が持っている、少しばかりのたばこ・おさけ・古道具などと、取りかえて、大きなりえきをえるようになりました。

そのうちに、和人の商人たちは、物を取りかえるだけでなく、自分たちの漁場を開いて、大きなあみを使い、一度にたくさんのサケ・マス・ニシンをとるようになりました。やがて、アイヌの人たちは、和人の漁場へ、むりやりにつれていかれ働かされるようにま

↑江戸時代の終わり頃の中標津市街のあたり
（北海道大学附属図書館所蔵）

でなったのです。そのため、コタンには、子どもと年よりだけがのこされ、秋から冬まで働いても、わずかな米と着物一枚くらいしかもらえなかったので、とても苦しい生活をしなければなりませんでした。

アイヌの人たちは、このような和人のやり方にたいして、自分たちのくらしを守るために、和人とのたたかいを何回もしました。

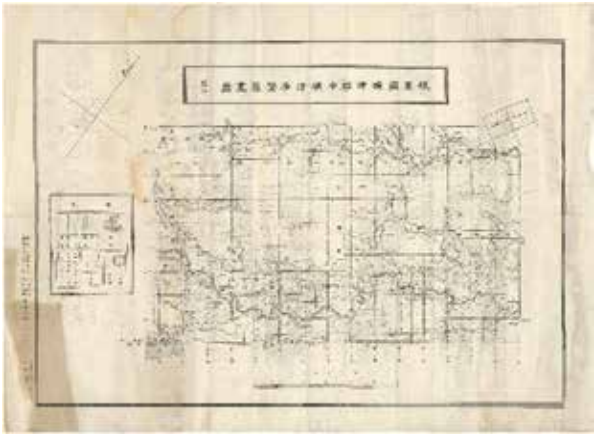
北海道の開たくが進み入殖者によって、森林がつぎつぎと切りたおされ、大きな道路がつくられるようになると、ついに、アイヌの人たちも住みなれた土地に別れをつげ、去っていかなければなりませんでした。こうして、様々な事があった後、アイヌの人たちにも和人と同じようなくらしができるように、いろいろなきまりがつくられるようになったのです。

もともとアイヌの人たちの住む土地だった北海道には、アイヌの人たちについての物語がたくさん伝えられています。

3 開たくのはじまり（乾定太郎の入殖）

明治時代、新しい国づくりのため、手つかずの自然豊な北海道を開たくして、産業をおこすとともに、ロシアなどから北海道を守ることを考えてました。

北海道庁が1886（明治19）年に発足し、道内において開たくが可のような土地がどのくらいあるか調べるための調査が行われ、「殖民区画図」が作られました。本州からの移住者は、この図を見てどこに入るかを選んで入って行きました。町の道路や畑、風



↑中標津原野の殖民区画図

などから産業およびくらしを守る防風林などのサイズや規模は、この図がもとになっています。

その後、1907（明治40）年に町内で最初の牧場が芦沢勇吉によって俵橋地区で営まれ、試験的に開たくに入る人もいました。開たくが本格的になったのは、明治時代の終わり頃のことで、北海道の中でも遅いほうでした。1911（明治44）年に乾定太郎を団長とした団体の移住により開たくが進んでいきました。

↑根釧台地の格子状防風林

↑芦沢牧場内の馬と芦沢勇吉

↑乾定太郎

4 開たくの苦労

北海道を開たくするために、北海道庁では、北海道のようすを書いた案内や、映画を作って、たくさんの人がくるようにせんでんしました。

1911（明治44）年、町に、はじめて開たく者が入殖してから大正時代

にかけて、少しずつ人がふえてきました。そのころの町は、道らしい道もなく、大森林のおいしげったところでしたが、この原野に入るにはおもに３つの道がつかわれました

　そのひとつは、釧路から小さな船にのって釧路川をすすみ、次に、人が泊まったり休んだり、馬を乗りかえる駅てい所から駅てい所へと歩いて中標津にむかう方法。

　もうひとつは、釧路から根室まで船できて、そこから標津まで歩いて中標津に入るか、または、船で標津まできて中標津にくる方法。

　さいごは、網走から斜里まで歩いて、駅てい所に泊まりながら何日もかかって、根北峠をこえ、川北を通り中標津につくなどの方法でした。

　大正時代の開たく者は、おもにこの３つの道を通ってきたのですが、女の人や子ども、老人のいる家族をつれて、あせを流し、足にマメができても、いく日もかかって歩いたのです。

　川の近くは農業によい土地なので、みんな早いもの勝ちで手に入れようとしました。

　そして、まず最初に小さな小屋を建てます。

　この小屋は、人が手を合わせておがんだときのような、三角形のそまつな

↑せんでんの案内

↑武佐の駅てい所（今の上武佐市街）

↑おがみ小屋の復元（開陽小学校）

ものなので、「おがみ小屋」とか「ちゃくしゅ小屋」などとよばれました。このほかにも、その形から「あみがさ小屋」、「さんかく小屋」、「カマボコ小屋」などとよばれるものもありました。次に、大きな木を切りたおして焼き、家を建てる場所をつくってから、ササやカヤの屋根をつけたほっ立小屋を作るのです。

↑開たくの記念にとられた写真

開たく者の中には、木の皮をはりつけてその上に土をかけるという、当時としてはりっぱな小屋を建てる人もいました。

家と家は遠くはなれていて、小さな道がついているだけです。

↑昭和の初め頃の家族写真

入殖した人は、このような小屋に住みながら開たくをはじめました。

馬をかりるのには、お金がかかるので、重いクワを持ち、ひとクワひとクワ自分の手で土地をたがやしました。ですから、1反歩（＝いったんぶ＝10アール）の土地をたがやすのに10日もかかりました。

それでも、毎日毎日あせにまみれながら、一生けん命に働いたのです。

冬になると屋根やかべのすき間から雪が入りこみました。朝、目がさめると、ふとんの上は白くなり、えりははくいきでカチカチにこおっていました。

食べ物は、そば粉で作った、だんごやそば焼きが多く、麦にマメやイナキビを混ぜたごはんは、ごちそうでした。お米は、お盆やお正月のときだけしか食べられなかったのですが、川には、たくさんのサケやマスがのぼってきたので、食べ物にはこまりませんでした。

服はほとんど着物を着ていました。子どもたちは、冬でも（わたの入った）

着物を着て、手ぬぐいで、ほおかぶりして学校に通いました。

くつは、わらで作った、ぞうりやツマゴ、鮭の皮で作ったくつをはくこともあったそうです。冬には赤いもうふを足にまきつけて、わらぐつをはいたり、雪の上を歩くときは、かんじきをはいたりしました。

5 北海道農事試験場の開設と酪農への切り替え

移住者の指導とこの地方に合った農業の試験や研究をおこなうため、国が1927（昭和2）年に北海道農事試験場根室支場（現在の伝成館）を作りました。

↑完成したばかりの試験場

手つかずの原野に、当時都会でもめずらしかったコンクリートづくりの建物が中標津にできたことから、移住者は中標津に夢や希望を感じ移住する人がふえて、市街地はまたたくまに大きくなりました。

↑現在の試験場（伝成館）

開たく当時の農業は、おもにそばや大豆など畑を作っていました。しかし開たくはきびしい自然環境のため、毎年夏に気温が上がらないことが原因で作物が育たず悩まされていました。特に1931、1932（昭和6、7）年は作物が育たず、たくさんの人が土地をはなれていくことになりました。これをきっかけに酪農へと切り替えられるようになりました。

↑大きくなってきた中標津市街（東１条通り）

6 交通の歴史

江戸時代の終わりころ、標津川とケネカ川沿いにあったアイヌの人たちのふみ分け道を江戸幕府が新たに作り直して、標津から計根別を通って斜里へ通ずる道がつくられました。

その道は、70年程の間、たくさんの人に使われましたが、毎年冬になると通ることができなかったり、雪で壊れてしまう大変な道だったりしたことから、明治時代の中頃には今の根北峠を通る道に替わっていきました。

明治時代の終わり頃から始まった開たくにより移住者がふえるにつれて、道路ができて中標津各地に駅てい

↑江戸時代終わり頃の標津のようす
（北海道大学附属図書館所蔵）

↑養老牛の駅てい所

所がつくられるようになりました。

1925（大正14）年には、人やモノを運ぶため、鉄道よりも線路幅のせまい「しょくみん軌道」が日本で初めて使われていきました。ほとんどの動力は馬でしたが、1929（昭和4）年には、ガソリン機関車が走りはじめました。

↑しょくみん軌道

昭和になって、移住者が増えるにつれて、「しょくみん軌道」だけでは、肥料などのモノを運ぶことが間に合わないので、鉄道が通ることをきたいしていました。ついに1937（昭和12）年10月移住者たちが待ちのぞんでいた鉄道が開通しました。

↑鉄道が開通したばかりの頃

標津線というこの路線は、厚床―中標津の支線と、標茶―中標津―根室標津の本線からなり、丸山公園の郷土館横にある蒸気機関車のC11やC12が走ることもありました。

↑旧中標津駅

鉄道の開通は、毎年のように続く凶作にうちのめされた住民にとって、新しい希望を与えてくれました。また交通が便利になったことで、中標津地方の開たくがいっそう進み、中標津は根室内陸の中心地として、酪農だけでなく商業も大きく発展したことから中標津村が誕生しました。

一日も休むことなく利用されてきた鉄道は中標津の発展になくてはならないものでしたが、自動車の普及や道路網の整備により、その役割を失ってしまい、1989（平成元）年４月２９日をもって廃止されました。

今、駅のあったところは中標津町交通センターになっています。

いっぽう、戦争中につくられた飛行場を整備した、中標津空港が 1965（昭和 40）年に開港しました。

だんだん乗る人が増えてきたため飛行機は大きくなり、札幌や東京への定期便が毎日飛ぶようになりました。

↑廃線となった中標津駅

↑札幌への定期便（YS11 型機）

7 中標津村のはじまり

荒れ地だった根室原野の中標津は、一年中ガスがたちこめていて、農業どころか、人も住めないと信じられてきました。

しかし、1909（明治 42）年に、俵橋、川北地区で開こんをためしてみたところ、農業ができることがわかり

↑急に大きくなった中標津市街

ました。このことが道内外に伝えられると。俵橋・武佐・開陽・俱落に開たくする農家がふえ、人口も多くなってきました。

1918（大正７）年に 1,731 人（400 戸）だった人口も、1932（昭和７）年には、中標津市街地だけで 100 戸をこえるようになりました。

海岸地方にくらべ内陸は、開発がおくれぎみでしたが、1923（大正 12）年に標津、中標津をふくめて標津村となりました。昭和になって開たくが急に進み、学校や店ができ、道路がつくられ、郵便局が置かれ、電話も使えるようになりましたが、1931（昭和６）、1932（昭和７）年には、夏季に気温が上がらず作物が育たない不作に合うなど、大変苦労をしたこともありました。

↑不作から立ち上がるためスローガンが書かれた杭

その後、中標津の方がどんどんひらけ、人口も 9,644 人となり、1946（昭和 21）年に中標津村となりました。

8 戦後開たく

第２次世界大戦が終わり、国は戦争から帰ってきた人たちに働いてもらうため、そして食べものをたくさん作らなければならなかったので、戦後開たくが進められました。

中標津でも俱落や西竹地区を中心とする広大で平坦な土地が緊急開た

↑開たく者が住んでいた小屋

く地として入殖が進められ、たくさんの人がやってきました。

しかし、戦争後で食べ物が手にはいりにくい上、大変な作業の毎日のため、この土地を離れていく人もたくさんいました。

↑レーキドーザーでの開こん

戦争が終わってからの10年間で、1,379人（377戸）が定着しました。

その後の根釧パイロットファーム事業をはじめ、国の事業により農地が広がっていきました。

9 町の発展

1950（昭和25）年1月1日、中標津村は中標津町と改められました。

中標津町は、根室管内内陸部の中心となり、鉄道やバスが集まっていて、羅臼、根室をはじめ、釧路方面に行くにもとても便利になりました。

また、平成に入って鉄道はなくなってしまいましたが、中標津空港があり、飛行機で札幌や東京などにわずかな時間で行けるようになりました。

このように、交通が便利になってきたことや町の開発が進んできたことから、いろいろな店や役所ができて、新しい町として栄えるようになりました。

中標津市街には人口の大半が集まっており、役所や銀行をはじめ、いろいろな商店や大型店が立ち並び、さらにこの地方の人々の生活になくてはならないものがほとんどそろっており、周辺市町から買い物に来るようになりました。

地球が丸く見える開陽台、歴史のある養老牛温泉、おいしいチーズや牛乳

↑町になった頃の中標津市街

が、広くみんなに知られるようになりました。

また、中標津町は酪農がさかんで、およそ43,000頭（2022（令和4）年現在）の牛がかわれ、馬れいしょのほかにも、てんさいや大根、ブロッコリー、小麦、そばなども作られています。

村から町になってからも人口は毎年ふえてきました。根室振興局管内で根室市に次いで2番目に大きな町に発展しました。

町の人々は、この中標津町を、もっと豊かな住みやすい町にしようと考え、努力してきました。

↑今の中標津市街

↑開陽台のてんぼう館（平成7年）

今も、町に住む人々の考えや、願いをもとにつくられた、町づくりの計画

によって、次々に新しい仕事が進められています。

　みなさんも、どうすればこの中標津町をもっと住みよい豊かな町にすることができるか、いろいろ考えたり話し合ったりしましょう。

↑開たくから 100 年の時をかけてできた空から見える格子状防風林の風景がつくられた。

学習のまとめ

「中標津町のうつりかわり」を学習して分かったことをまとめましょう。

①中標津の昔はアイヌの人たちが住んでいた。

②開たくのため人々が住み着くようになったのは 100 年ほど前からである。

③開たくは、人の力によるもので、長い間の苦労があった。

④自分たちの住んでいるところをよくしようとする、地域の人々の協力があった。

町の“おたから”を探して、見てみよう～

北海道デジタルミュージアム

　北海道デジタルミュージアムでは、郷土館で展示されている資料をネット上で見ることができます！

　URL 又は QR コードより、アクセスして「施設情報」ページの右側の「収蔵資料」をクリックして資料を探したり、見ることができます。

サイト管理者：北海道環境生活部文化局文化振興課

URL：https://hokkaido-digital-museum.jp/facility/ 中標津町郷土館 /

メ　モ